



# アバカス・サーキット第300戦（3月大会）成績



## F1 自己記録更新者（参加者 5010名）

氏名	得点	アップ点	学年	学年別	
				順位(上位%)	参加人数
首藤 菜仁	212	+6	小5	176 (19%)	937
原田 龍晟	158	+6	小5	390 (42%)	937
平手 九	128	+10	小5	557 (59%)	937
池田 充希	102	+12	小5	689 (74%)	937

\*F1…たびたび記録更新する人は、かけ・わり・みとりの3種目の得点差があまりなく、各種目がバランスよく取れています。また、昨年6月の一回目と比べると多くの生徒の点数が飛躍的に伸びていますが、左の4名もみな30点以上アップ、中には60点以上も伸ばした生徒もいます。短期間にすごい成長！

\*F2…合格者はいません。

## F1で150点を越えた人の一覧

実施月	氏名	学年	かけ	わり	みとり	得点
23年12月	林 亜蓮	小6	86	84	80	250
24年3月	首藤 菜仁	小5	70	66	76	212
24年1月	伊東 大輝	中1	66	70	72	208
23年9月	伊藤 彩羽	小6	62	66	74	202
23年11月	北國 彦吉	小6	54	58	62	174
23年12月	鈴木 桃寧	小4	52	52	62	166
24年3月	原田 龍晟	小5	50	60	48	158

\*学年は実施した時期のもの

昨年の春からスタートしたアバカスサーキット、ちょうど1年が経過。この期間、10回ほど大会に参加していますが、現時点で現役生のなかで **150点(赤文鎮)を超えた人**たちは右の通り。みんな、まだまだ進化中で伸びしろもあるので、今のレベルで満足せずにさらにスキルアップを目指しましょう！

ちなみに全珠連の暗算検定のレベルと比べてみると、160点=初段、180点=2段、200点=3段、220点=4段、240点=5段、260点=6段という感じ。

## ◆アバカス・サーキット ‘24年度 上半期（4月～9月）スタート◇

今月(4月)から新たに10名以上の生徒が新規参入し、総勢30名以上でアバカス・サーキット上期が始動します(アバカスとは英語で‘そろばん’の意味)。ご存じない方のために簡単に説明すると…

- ・珠算式暗算力の育成が目的の通信大会(毎月1回実施) ・F2クラスから始め、**150点以上でF1へ**
- ・種目はかけ算・わり算・みとり算、F2は各30問ずつ(全90問) ・F1は各50問ずつ(全150問)
- ・暗算で計算すると1問2点、そろばんは1問1点(基本的にすべて暗算で行うことを目的とする)
- ・エントリーは半年に1回となり、次回は10月に下半期(10月～3月)の申し込みとなる

\*全珠連の暗算検定の場合は6級から始まり難度と比例して順次、級位が上がっていく。例えば見取り算を例にとると、下表のように全珠連の暗算検定では各級位に応じてレベルの範囲が定まっている。一方、アバカス(F2)では易しい問題から段階的にレベルアップしていき、最後の10問は暗算検定では遭遇することのない7口、これはしっかりした珠算式の暗算力がないと正解にはたどり着かないレベル。アバカスはさまざまなタイプの問題にチャレンジすることで総合的な暗算力を養っていくことが目的。

\*当然ながら参加した直後は大半の生徒はスムーズに進んでいかず、3歩進んで2歩下がるようにゆったりペースだが、繰り返し練習していくと、半年から1年くらいで多くの生徒はグ～ンと成長しメキメキと暗算力を身に付けていく(目安としてF2の150点は全珠連暗算3級合格と同等の実力)。

\*アバカスの時間配分は最初の10問は1分間、次の10問は1分半、残りの時間で最後の10問に挑戦するというイメージで進めることが出来るとだんだん150点の背中が見えてくる。

\*アバカスで難易度に幅のある問題を経験することで、全珠連の暗算検定の問題が容易になり、ラクラク進級していく場合が殆ど。

\*F2に合格した後はF1だが、通常はすぐにF1に入らずに、まずはF2で170点くらいが取れる実力を身につけてからF1ステージに進む。特に見取りの暗算力がとても大切。

### 見取り暗算 全珠連とアバカス(F2)の比較

全珠連 (3分間20問)			
級位	ケタ数	口数	加減算
6級	1～2ケタ	3口	なし
5級			
4級	2ケタ	4口	
3級			あり
2級	2～3ケタ	5口	
1級	3ケタ		

アバカス F2 (5分間30問)			
番号	ケタ数	口数	加減算
1～10	2ケタ	3口	なし
11～20		5口	
21～30		7口	あり

\*加減算…引き算が入っている見取り算のこと。 \*F2の最後の10問は加算と加減算が5問ずつ。多くの生徒が最も苦勞するところ。